

図書館だより

北海道大学附属図書館報 第26巻2号(通巻170号) 2004.7.15

vol.26

NO. 2

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

上野誠治

2 出会いと $y=ax$

菊地 久

3 ある集落の郷土館で

嗟峨 浩

4 豪雨のお話

竹田正直

5 中国で、日本とロシアを考える

石嶋芳臣

6 用語の意味と意義

7 図書館レポート 2004

吉田 純

8 くだらない世の中だ ションベンかけてやろう
編集後記



文= **上野誠治**

(うへの せいじ/人文学部教授)

教務委員をしていると、講義や担当教員に対する学生からの苦情・不満を耳にすることが多くなる。聞いていて、なるほどと思える話から、それはちょっといくら何でもねえ、といったものまで実にさまざまである。教壇に立つ教員は、自らの研究分野を背景に、学生にとって有益と思われることや興味深く刺激的な知識を熱心に提供しているはずなのだが、それが学生の側に伝わっていないことも多いようだ。講義の仕方の巧拙（もちろん、それ自体大事な要素ではあるか）を別にすれば、この場合、知識の情報が教員から学生に対して一方通行でただ流れている可能性がある。学生は聞いているのか、それとも聴いているのか。

4月の新入生ガイダンスで、大学における勉学はどうあるべきかという少々説教じみた内容の話をした際、講義を聴いたり、本を読むときは、「能動的、積極的な姿勢が大切である」と訴えた。中には相性の合わない講義もあるかもしれない。しかし、考えようによっては、それは一種の「出会い」であり「縁」でもある。それを生かすも殺すも、その講義を聴くときの姿勢によるのでないだろうか。講義を聴いて、その中から何かをつかもうという姿勢が必要不可欠である。出会いと言えば、卑近な例として男女関係が思い浮かぶが、長年交際して結ばれても、すぐに別れるカップルもあれば、最初は嫌なやつだと思っていた、何かの縁で結ばれハッピーエンドを迎えるカップルもある。学生が出会う講義や担当教員の場合も同じで、双方の努力によって、この出会いを良い方向に持って行きたいものである。

養老孟司の『ハカの壁』（新潮新書）の中で、脳内の入出力モデルとして $y=ax$ という一次方程式が紹介されている。この場合、入力 x は五感から入ってくる情報、出力 y はその情報に対する反応のことで、 a は「現実の重

み」という係数である。通常、人は何か入力があれば、何らかの反応をする。係数 a がプラスと出るか、マイナスと出るかによって、入力に対してプラスの反応になったり、マイナスの反応になったりする。また、係数の大小によっても、それぞれの反応の度合いは変わってくる。他方、係数 a がゼロという特殊な場合は、いかなる入力があっても、出力がまったくないということになる。出力がないということは、行動に影響しないということである。講義のあと、学生の表情に教員が期待するような輝きが見られなかった場合、ひょっとすると学生は係数 a がゼロに近い値もしくはマイナスの状態ですべてを受けていたのかもしれない。良い影響を受けるためには、入力となる情報を積極的につかみに行く姿勢が必要であろう。強い好奇心や問題意識を持たない状態は、係数 a がゼロの状態に等しい。教員の積極的な教える姿勢と学生の積極的な学ぶ姿勢が激突して火花が散った時、そこからよい影響というものが生まれるのである。

もう一つ例を挙げると、あるテーマ（それはまだ「火種」のようなものかもしれないが）を常に頭の中で温めながら、図書館や書店などを逍遙していると、関連する書物の方から目に飛び込んでくるのがよくある。これなども、係数 a がプラスの状態にあるからこそである。係数 a がゼロで、何も考えずに漫然と彷徨しては、仮に目の前に必要な書物が並んでいたとしても、結局は見過ごされてしまうであろう。このように係数 a がゼロの状態からは何も生まれてこない。講義を聴くときも、やはりプラスの状態ですべてを傾けるべきであろう。聴く側の姿勢次第で初めて見えてくる情報もあるはずだから。ゼロやマイナスでは、せつかくの情報も見過ごされかねないのである。

ある集落の郷土館で

文＝菊地 久

(きくち ひさし/法学部教授)

道東の町村は現時において既にかなり広域で、一町村に様々な集落が散らばっている。かなり前、偶然にそうした集落の一つを尋ねた時に、大きくはないけれど鉄筋づくりでしっかりした郷土館があって驚かされたことがある。屯田兵入植の土地であつたらしく、その資料がきちんと整理展示されていて、どことなく土族入植の誇らしさを漂わせていた。

聞くところによると、例のふるさと創成一億円をもとに作られたとか。確かめたわけではないので噂話程度にとどまるが、純金のフィギアを作って無意味な観光ディスプレイとするよりはよほど賢く、おまけに過去を観光の種にするよりは自分たちで語り継ごうとする気持ちが勝っている感じで、ある種の見識さえ伝わってくる。資料集積の手間を併せ考えると、正直、すごいなあと思った。

それからしばらくして、町の親切で気さくな職員の方と話をした折、好感と困惑とが相半ばする感じで、あそここの地区は一家言あることが多く、なかなか気位が高いですよとのこと、なるほどと妙に納得してしまった。昨年暮れには『屯田兵名簿』が上梓されて、その地区の入植者一覧が手軽に知れるようになったが、入植が軌道にのったのは「大正に入り馬産が成功してから」とのこと、はたして幾人の方の子孫が現存されるのか、まことに興味深い。

こんな話をするのは、歴史資料を探る仕事柄、日本のあちこちを見て回って過去の扱い方の様々に接するからである。当然だが、人は過去を粗末にすることもあれば、大切にすることもある。それで、粗末にするから悪い、大切にすれば良いかといえ、そんな単純なことではない。近代史の人物や史跡でいうと、戦前からその保存に熱心なところでは、百年を超えずして「偉人」を神様に神社に祭るといった風で、土地を尋ねて鼻白むことも少なくない。逆に、神様に祭りそこねて生家は朽ち果てるままに、戦後もなおそのままといった場合でも、そもそも「偉人」とは何者ぞといった風があつて、かえって気持ちがよいということもある。つくづく、土

地柄だなと感じることも多いのである。

扱いは様々は、もちろん、時代毎でもある。戦後であれば、高度成長から後によややく人物顕彰がその幅を広げ、史跡の保存も篤志家の域をこえて本格化した感じである。自身の記憶からすると、幼い頃には戦前からの古色然とした郷土館があつて尋ねて結構面白かつたのだが、高度成長期に入って市庁舎がビル化される頃にはもはや資料館の補修はされず、展示物は一時倉庫行き、再開されたのはあばら屋の記憶しかなかった昔の洋館、子供心にもどうしてこんなに粗末に扱うのかと腹が立って仕方がなかった。こうした状況が改まるのは、1970年代以降、さらに80年代を迎える頃で、石油ショックの痛手から立ち直りバブルに流れるにつれてである。大河ドラマが人物や史跡の観光化をもたらし、あちらこちらに倉敷に似たセット風の景観が広がっていく。そして、これを追い風に、国や道府県レベルで大型の歴史資料館がつくられる。市町村では、なお別の箱物作りで忙しいが、それでもさすがに過去が観光種となるかもしれない、一昔前のように粗略にすることはない。昔セットと大型館と観光種狙いの現在である。

道東の一集落の郷土館がステキなのは、土地柄が明らかに、なによりもこんな調子の浮世と一線を画するからである。世の中の大勢と無縁であるはずはないが、大勢に同調してなおの一面目があつて、実に楽しい。そして、そのおかげで、結構いろいろ考えさせてくれるのである。例えば、未来の夢を優先させると、今現在にはたえず未来のためのワンステップで、いつもテンポラリーになってしまう。このままでは、決して今を生きることができない。では、今現在に過去を意識するとどうなるのか。過去を汚さず、失わず、そのために今があつた時代もありえたが、まさか今時そんな想定はできまい。過去は今の集積で、だからこそ愛おしいなら、未来も今の集積にすぎないと分かり、もしかすると今を生きる拠所が分かるかもしれない、等々。手作りの仕事は、こんな具合に哲学させてくれるのである。

豪雨のお話

文＝嵯峨 浩

(さが ひろし／工学部教授)

「図書館だより」のお話としては、主旨違いのテーマだと思うが雨による災害について書かせて頂きたい。実は、昨年の8月、台風10号による胆振・日高地方の豪雨災害の「災害調査団」の一員として何度も現地に足を運び、災害の原因解明と調査を行なう機会を得たからである。残念なことに数人の尊い命が失われた大惨事であったし、何人かの本学学生の親御さんも被害を受けたと聞いている。なるべく数字を並べることは避けようと思うが、この台風による雨は、2日間で304mmに達し、1時間で70mmを超える雨が記録されている。災害の原因はと問われれば、観測史上最高の豪雨であったからと言わざるを得ない。具体的な事例を述べることはできないが、台風10号の災害でも雨の降り方をみて、早めに避難すれば被害が軽減したと思われることがあったので、人の感じる雨のイメージと災害の目安を述べたいと思う。雨は人間に被害を与えない範囲で少し降る程度ならば情緒的であり、相合傘でカップルが幸せそうに歩く姿はロマンチックである。今回、このような雨は御遠慮願うとして、最初に身の危険を感じていただきたい雨は、傘が利かな

い・ワイパーを使っても車を運転しづらい時である。こんな時、都市部では側溝や小さな川が溢れ、山間部では崖崩れが起こる可能性が高くなる。バケツをひっくり返したように降り、道路が川のようなになればとにかく低平地や川の傍から逃げるしかない。下水管から水が溢れ、山崩れや崖崩れが起きやすくなり洪水等の災害が起きると考えて間違いないからである。このように断言すると本当か、外れたらどうするという御意見が聞こえてきそうだが、外れた方がどんなに良いことか。

講義で、「豊平川で洪水は起きないと思う人、手を挙げて」と問うと何人かの学生は手を挙げる。何故かと言えば、彼らは豊平川が溢れたところを見たことがないからである。確かに「150年に一度、降るであろう大雨には耐え得る堤防」を計画・築造しているが、この堤防の能力を上回る大雨が降る可能性は否定できないのである。雨の降り方で災害を予想して、自ら避難する、こんな習慣が身に付けば、尊い命が一つでも二つでも救われる事になると思うのだが。

1時間雨量(mm)	人の受けるイメージ	屋外の様子	車に乗っていて
10～20	ザーザーと降る	地面からの跳ね返りで足元がぬれる	
20～30	どしゃ降り	傘をさしてもぬれる	ワイパーを速くしても見づらい
30～50	バケツをひっくり返した様に降る	道路が川のようなになる	高速走行時、ハイドロプレーニング現象発生
50～80	滝のように降る（ゴーゴーと降る）	水しぶきでまわりは白っぽくなり、傘は全く役に立たない	車の運転は危険

気象庁資料より一部修正加筆

中国で、日本とロシアを考える

文＝竹田正直

(たけだ まさなお／経済学部教授)

“60年目”の中国訪問

3年前の夏休み、2001年7月18－25日に、本学の学生、院生、教員と一緒に中国・遼寧省瀋陽市にある本学の姉妹大学の遼寧大学と瀋陽農業大学を訪問した。私にとっては、初めての中国訪問であった。とくに、戦前、私が3歳のとき、後に、母や長兄の話によれば、当時、北京の近くで食堂を経営していた父を訪ねて、母が私を連れて行くことになっていたが、急に、兄を連れてゆくことになり、私は祖母と田舎に残ったとのことで、いわば、中国訪問の可能性が60年ぶりに実現したことになる。

遼寧大学で比較経済学の教授から中国経済の講義を聞いた。その後の討論のさいに、私は、企業内の継続教育の発展の必要性を述べたが、その後、父が食堂経営とはいえ、植民地支配へ加担したことをお詫びした。黄継忠教授は、今後の友好にその想いを役立てましょう、と言ってくれた。

旅順、203高地に立って

瀋陽市は札幌の姉妹都市4つのうちの1つで人口675万人の近代都市であり、かつ、9・18歴史博物館などの歴史都市でもある。中国は、私の好きな人を育てることの幸せを語った管子や魯迅を育んだ地でもある。遼寧大学のマイクロバスで約7時間、高速道路を走り、大連市、旅順へ行き農業と漁業の間きとり調査を行い、帰路、「日露戦争」の勝敗を決した激戦地の一つ、「203高地」に登った。

203高地の頂上に立ち、日本とロシアの支配者たちが帝国主義的野望を持って1904年から始めた日露戦争によって、中国の国土と人びとが蹂躪さ

れ、かつ、203高地での、日露両軍約2万人の戦死者（日本8割）のうち、3千人余（他に8千人の傷病）が北海道民であったことや「敵の將軍ステッセル、乃木大将と会見の…」の歌、今の正露丸が「征露丸」であったこと等を思い浮かべた。

「樺太領有」と「日露戦争百年」

1905年、薄氷の「勝利」を収めた日本は、「ポーツマス条約」で、ロシア領であったサハリン南部を領有した。これは日露両政府が、平和時の交渉でサハリンはロシア領、千島列島は日本領とした樺太千島交換条約（1875年）に反するものであり、1945年8月に日ソ連が米、英、中国（蒋介石）の支持で、サハリン南部のみならず日本領の千島列島をも戦勝によって領有する遠因をなした。

今年、2004年は、「日露戦争百年」にあたる。この機会に一読又は再読の書として、大江志乃夫『世界史としての日露戦争』（立風書房、2001年）を挙げる。また、わが『北海百年史』（学校法人北海学園、1986年）を読むと、丁度、現在の北海高校が北海中学へと発展（1905年）した時期の教員の中に日露戦争に反対した教師がいたことを知る。日露戦争後も南樺太に残った約2百人のロシア人の苦悩と、日本人との草の根の交流を記したフェドルチューク著、板橋政樹訳『樺太に生きたロシア人』（ナウカ社、2004年）も必見である。

国家や民族を越えた人びとの「共生と共育」を、「教育の共生体」概念で論ずる試みは今夏、2004年8月26、27日、北海学園大学で開催される日本教育学会第63回大会のモチーフの一つである。

用語の意味と意義

文＝石嶋芳臣

(いしじま よしおみ／経営学部助教授)

テレビや新聞などを眺めていると、全く間違いでもないが、どこか用語の使い方が変じゃないかなって思う時があります。

最近、企業の不祥事が議論されるときに、「モラル・ハザード」という用語をよく耳にします。括弧書きで「倫理の欠如」と補足されていたりします。確かに直訳すれば倫理的な危機・危険ですが、わざわざ括弧書きで、言葉の持つマイナス・イメージをさらに増幅させる訳語を当てるのはどうかと思ってしまう。元々は保険用語です。人々が保険を掛けることによって、むしろ損害を回避したり軽減しようとする注意を怠るようになり保険会社の負担が増加する傾向を指していました。これを新制度派経済学が情報と効率性の問題から議論したもので、当事者の悪意や自己中心的な行動を直接指すものではないのです。単に訳語上の問題かも知れませんが、「たらい回し」は「たらい」を「回す」ことではないのです。

他にも例えば、「社員」は法的に「出資者」の地位を表しますから、株式会社であれば「株主」を指すのであって「従業員」ではないのです。「リストラ」は、リストラクチャリング (Restructuring) = 事業の再構築ですから、「人員整理」「事業縮小」だけではないはずです。その用語自体に別の意味が付与されて日常化した上、矮小化してしまったのかも知れません。しかし問題は、用語の意味内容がすり替わってしまう時です。

欧米で言うところのIndustrial pollutionが、いつの間にか「公害」となっている。どうも一説では、高度経済成長の代償として、単に工業が自分たちの都合で汚染対策を怠ったからではなく、国民

が高度な経済成長を望み続けるがゆえに起こるべくして起こったものだから、国民全体がその責任の一端を負っている。環境問題は、決して工業など一部の分野の暴走によってのみ引き起こされるわけではなく、それを受容する私たちがいるからこそ起きるものなのさ、ということで「公害」と言うらしい。しかしこの意味からすれば、Public nuisanceだろうし、かつて四日市や水俣の「私人」たちが肉体的生存を脅かされていた状況を含めての表現であるならば、加害者を曖昧にした実にマヤカシに満ちた表現と言えるでしょう。

〈公〉は、〈私〉との対概念ですから、政府や地方自治体などの〈公〉が、大企業とグルになって〈私〉を害するという意味ならまだ適切かも知れません。大気や水、土壌を汚染し破壊していく様々な化学物質の発生は、工業の産物以外の何ものでもないはずです。資本主義的工業による自然環境の汚染を意味するIndustrial pollutionは、断じて「公害」であると思うのです。そして、資本主義的「公害」の本質的問題は、自然環境のみならず人間精神すら汚染し破壊するところにあるのです。先進資本主義諸国における人間破壊と社会的崩壊の症状は、自然環境の破壊と同じように深刻化しており、非行、離婚、虐待、自殺、アル中、麻薬常習、精神患者などの増加という社会的混乱現象と結びついているのです。

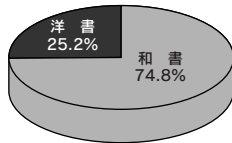
個々の出来事は相互に関連しあっており、その相互関連性を貫く物事の本質を把握し、ハッキリ認識するためにも用語の意味内容を正しく理解しておかなければならないでしょうね。ところで、「意味」と「意義」はどう違うのでしょうか？

図書館レポート 2004

蔵書冊数 (2004年3月31日現在)

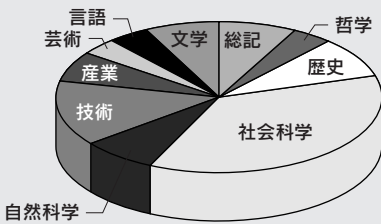
	和書	洋書	合計
蔵書冊数	530,325冊	179,091冊	709,416冊

ちなみに2003 (H15) 年度の1年間の受入図書冊数は、25,761冊でした。
 学術雑誌は、9000種を超えるタイトルを保管しています。



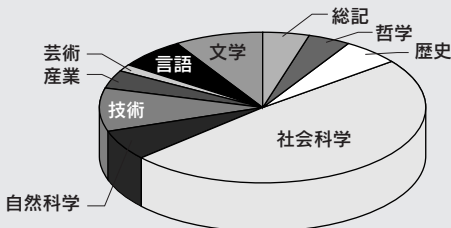
【和書】

000 総記	40,799冊	7.7%
100 哲学	21,161冊	4%
200 歴史	46,030冊	8.7%
300 社会科学	193,999冊	36.6%
400 自然科学	39,554冊	7.5%
500 技術	74,025冊	14%
600 産業	34,735冊	6.5%
700 芸術	18,980冊	3.6%
800 言語	21,766冊	4.1%
900 文学	39,276冊	7.4%
計	530,325冊	100%



【洋書】

000 総記	8,309冊	4.6%
100 哲学	7,549冊	4.2%
200 歴史	10,152冊	5.7%
300 社会科学	87,441冊	48.8%
400 自然科学	11,695冊	6.5%
500 技術	16,639冊	9.3%
600 産業	7,035冊	3.9%
700 芸術	2,615冊	1.5%
800 言語	11,861冊	6.6%
900 文学	15,795冊	8.8%
計	179,091冊	100%



一カウンター・サービス関係統計一

	2001年度	2002年度	2003年度
入館者数	484,037人 (1日当り1,657人)	461,006人 (1日当り1,628人)	439,823人 (1日当り1,517人)
貸出者数	延べ30,077人 (うち学生 28,205人)	延べ37,630人 (うち学生 34,979人)	延べ34,147人 (うち学生 29,421人)
学生一人当りの貸出回数	3.3回	4.0回	4.0回
貸出冊数	53,876冊 (うち学生 49,206冊)	64,657冊 (うち学生 58,346冊)	56,553冊 (うち学生 46,271冊)
学生一人当りの貸出冊数	6.2冊	7.3冊	6.6冊
PCブース利用者数	延べ 3,092人	延べ 3,864人	延べ 4,272人
AVブース利用者数	延べ 386人	延べ 1,844人	延べ 3,638人

一レファレンス・サービス関係統計一

【学内での調査】

	教職員 (前年度対比)	学生 (前年度対比)	合計 (前年度対比)
文献所蔵調査	40件 ▲9件	99件 +40件	139件 +31件
事項調査	5件 ▲9件	37件 +10件	42件 +1件

【学外に調査依頼・学外からの調査依頼】

●複写業務

	国内向け (前年度対比)	国外向け (前年度対比)	合計 (前年度対比)
学外に依頼	292件 ▲119件	13件 ▲4件	305件 ▲123件
学外から依頼	150件 ▲42件	2件 +2件	152件 ▲40件

●貸借業務

	国内向け (前年度対比)	国外向け (前年度対比)	合計 (前年度対比)
学外に依頼	185件 ▲19件	9件 ▲7件	194件 ▲26件
学外から依頼	91件 +12件	1件 +1件	92件 +13件

●文献所蔵調査

	国内向け (前年度対比)	国外向け (前年度対比)	合計 (前年度対比)
学外に依頼	34件 ▲16件	0件 ±0件	34件 ▲16件
学外から依頼	31件 +8件	0件 ±0件	31件 +8件

【学外者利用者数および本学関係者他利用者数】

学外者数	46人	他館利用者数	88人
------	-----	--------	-----

【図書委員】

- 図書館長 小林 真之
- 経済学部 上村 仁司
- 経営学部 春日 賢
- 法学部 加藤 信行
- 人文学部 常見 信代
- 工学部 佐々木正規

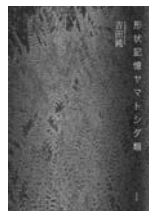
【図書選定委員】

- 経済学部 川瀬 雄也 上村 仁司 北倉 公彦
- 経営学部 早川 豊 福野 光輝 石井 晴子
- 法学部 加藤 信行
- 人文学部 小野寺静子
- 工学部 佐々木正規

くだらない世の中だ ションベンかけてやろう

文＝吉田 純

(よしだ あつし/大学院文学研究科 日本文化専攻博士(後期)課程)



吉田 純 著
『形状記憶ヤマトシダ類』
北冬舎 2000円+税
北海学園生協にて発売中

初めて歌集を出版した。題名は『形状記憶ヤマトシダ類』。
作者が読者を選ぶことはできないが、やはり学生のあなたたちに読んで欲しい。

吊革に捕縛されたる背広たち奴隷市場に送られていく
どっぴりとオリーブオイルに漬けられて沈む鯛のようだお前は
缶ビール飲み干し握りつぶすまで俺がお前をへこましてやる
いつの日もつば吐く向こう見つめてた ガードレールを蹴飛ばしなから
みんなは羊のように黙っているあたたかそうに苦しんでいる

まったく最低な世界に、最低な大人たち、そして最低なボくら。うわべはキレイごとだらけの世の中で、ボくらはそのキレイごとだけのために、多くのものを殺しつづけていくことだろう。『形状記憶ヤマトシダ類』という題名は、そんな時代的雰囲気流されやすい、そしてふたたび人殺し(戦争)の片棒をかつぎだした「日本人」そのものを意味している。

わが身をまもるため陰湿に権力に迎合しつづけるシダ植物(「日本人」)は、今日も「癒し」の名のもとに「声に出して読みたい日本語」を語り「愛国心」を育てつづける。ほんとにヘドが出る話だ。「声」にも出せないような醜い真実は「声」に出す必要はないのですか。くさいものにはやはりキレイごとでフタですか。

美しき国語に嘔吐せしわれは規律神経失調症か
さむき未来避け難くあり 地下鉄はつきなる闇へ行くほかはなく
捨つるほどあまた記念日持つわれに憎み合うべき記念日がない
捨て猫の名はアルカイダ 煩ちやる傷もためゆえ終らない歌
死語辞典に「帝国主義」はいまだ載らず 緋牡丹墮ちる音をきくのみ

思っているほど人間は上等じゃない。もともと墮落しているからこそ、「武士道」や「天皇制」という枠組みをつくりあげずにはいられなくなる。そして墮落という起源だけが消し去られ、枠組みをキレイごとによりまみりたてては思い上がりたりする。ボくらは、もはや人間の醜さを語ることでしか、真実を見極めることはできないだろう。だからボクは、日本人の闇を、人間のうちなる廃墟を、短歌で描きつづけていきたい。

短歌はある意味、パンクだと思う。最低の世界だと、最悪なボくらが叫ぶのだ。かつて「ブルーハーツ」という日本のパンクバンドは、このように叫んで世の中に登場した。

「くだらない世の中だ ションベンかけてやろう

打ちのめされる前に 僕ら打ちのめしてやろう

(「未来は僕らの手の中」)

キミも「ションベン」かけてみないか。キレイごとと好きの思い上がりに打ちのめされる前に。

編集後記

『われに語学を!』

そう叫び続けて、早、幾年月……。

カウンターを中心に語学力不足を嘆く日々未だ別れを告げられずにいます。

さて、そんな私とは大違いに、日々、語学勉強に勤しむ学生のみなさんへ、図書館よりお願いがあります。

図書館に所蔵する語学関係の図書には付録CD-ROMがついている場合があります。本体の図書と一緒に付録CD-ROMを借りた場合は、必ず両方セットで期限内に返却してください。次に借りる利用者が困ってしまいます。

以上、ご協力をよろしく願います。